

東海林 豊

リーダーの肖像
Vol.45

「断らない慢性期病院」の実現目指し 院内の体制整備と地域連携の強化に注力

東京さくら病院の開院にあたってその計画段階から参画し、院長を務める。
「断らない慢性期病院」を目指してさまざまな改革・取り組みを断行してきた。
これからの社会を見据えて病院の舵取りを担う。



職員とコミュニケーションをとり、関係性を深めている(写真右から3番目が東海林院長)

理念と経営哲学

▼「断らない慢性期病院」を目指す

入院判定会議を廃止するなど、紹介を断らない方針を明確化。そのために慢性期に合ったPFMを実践

▼リーダーとして常に「人蕩」を考える

職員が嫌な仕事でも楽しむことができるように働きかけることがリーダーの役割と考える

嫌な仕事でも楽しんでもらいたいことが リーダーの役割

2013年に開院した東京さくら病院。東海林はその開設準備からかわり、現在は院長として病院の舵取りを担っている。目指す方向として開院当初から掲げているのは「断らない慢性期病院」だ。

その実現のために最初に行ったのが、入院判定会議の廃止だった。外科医として急性期病院を中心にキャリアを積んできた東海林にとって、入院受け入れの可否を判断するための会議があること自体に違和感があったこともあり、取りやめることを決めた。

「断らない」という姿勢を明確に示すためにも、会議を廃止した。ただし、断らないという方針が職員一人ひとりの善意によって成り立つものにはしたくない。そこで、慢性期に合ったPFMを実行している」と東海林は言う。

具体的には、医療療養病棟、回復期リハビリテーション病棟、緩和ケア病棟、地域包括ケア病棟を有し、療養・回復期リハ・緩和ケアの3病棟で受け入れ不可の場合はすべて地域包括ケ

アで受け入れる体制を構築。さらに、「m(モディファイ)…一部修正することの意)PFM」として東海林と連携室職員、各病棟病棟長が病棟の状況を把握しコントロールする運用を敷いた。

同院は外来を実施していないため、入院ルートは紹介のみである。そこで集患の面からも断らないことを掲げると同時に、連携先とのつながりを強化するための取り組みを複数行っている。

その一つがケアマネジャーなどと顔の見える関係性を構築するための「えんこみカフェ」だ。一つの縁から新しいコミュニティが生まれるというコンセプトに基づいて開院当初から実施されており、現在も定期的に開催されている。

また、同グループが独自に開発した「介護天気予報図」も連携強化に一役買っている。これは、介護施設に入居している利用者について、介護職員が決められた項目に回答すると健康状態が数値化され、晴れや曇りといった天気予報のマークで状態が表示される健康トラッキングシステム。開発の狙いについて東海林は「医療と介護の連携においては利用者の状態把握が不可欠だが、今まではうまくいっているとは言えなかった。介護天気予報図を開発し、確認事項を明確化することによって介護現場から医師への情報の伝達が速やかになり、対応がスムーズになっている。また、『晴れのち曇りが3日続いたら入院』『大雨なら介護タクシーで入院』など天気マーク別にとるべき対応が決まっているので、介護現場の職員の不安を軽減することにも役立っている」と説明する。